

# 産業組織論 第07回

## 独占企業の行動

# 独占とは

- 独占

- 売り手独占：市場において操業している企業数が1のとき。通常、独占という場合はこちらを指す。
- 買い手独占：買い手が一人しかいないとき。

- 独占の発生する理由

- 生産要素の独占的保有（特許など）
- 規模の経済性（合併するインセンティブがある）
- 公的規制の存在（昔のたばこ・塩・電話）

# 独占企業の行動

目的が利潤最大化であることは同じ。

何が異なる？

⇒ 価格を自由にコントロールできる。

しかし、いくらでも高い価格にできるわけではない。

なぜ？

⇒ 高すぎると売れない。つまり、利潤最大化とならない。

# 独占企業の行動

では、どうするのか？

ある生産量に対して

- 需要曲線より上の価格・・・売れ残る
- 需要曲線より下の価格・・・品不足

となる。どちらも利潤最大化してない。従って、  
需要曲線上に来るように価格を設定する。

# 独占企業の行動

完全競争では利潤の式が

$$\pi = p \cdot y - C(y)$$

だったのが

$$\pi = P(y) \cdot y - C(y)$$

となる。ここで $P(y)$ は逆需要関数(需要曲線を逆に見たもの)。

# 独占企業の行動

- 利潤最大化の条件  
完全競争の時と同様、

$$\frac{d\pi}{dy} = 0$$

を計算すればいい。つまり、

$$\text{限界収入 (MR)} = \text{限界費用 (MC)}$$

# 独占企業の行動

完全競争では  $MR = p$  だったが、独占では

$$MR(y) = \frac{dP(y)}{dy} \cdot y + P(y)$$

となる(テキストの後ろにある「数学への案内」の「導関数の計算規則」参照)。

# 計算例

$D(p) = a - p$ ,  $C(y) = c \cdot y$ とする ( $a > c > 0$ )  
と、逆需要関数は  $P(y) = a - y$ ,

$$MR(y) = a - 2y, MC = c$$

であるから、利潤最大化の解は

$$y^M = (a - c)/2$$

また、そのときの価格は

$$P(y^M) = (a + c)/2$$

完全競争なら  $p = c$  のはず。



# 独占での社会厚生

一般に、 $\frac{dP(y)}{dy} < 0$  である（需要曲線は右下がり）

から、限界収入は価格より小さい。

⇒生産量は完全競争より小さくなる（＝非効率）。

# 独占での社会厚生

それ以外に、

- X非効率性（競争圧力がないことによる、経営努力の不足）
- レント・シーキング（財の生産に寄与しない、資源の無駄遣い）

による非効率も存在。

# レント・シーキングについて

- 無駄ではないかもしれない例 (Shy(1996))
  - R&D
  - 贈賄(これ自体は富の移転に過ぎない)
- 無駄かもしれない例
  - 説得的広告
  - 参入阻止のための過剰な生産や投資
  - ロビー活動
  - 特許を得るためのR&D競争